

このたびの特別寄稿について

明治大学駿河台校舎にて開催された平成12年度の学会大会で、「新しい時代と『あそび』の再考」と題するシンポジウムが開催されました。今後の本学会の方向性や具体的な課題などを、「あそび」というコンセプトを通して展望したいとの意図がありました。

ちょうど2000年の節目に開催されたシンポジウムということもあり、タイトルに冠せられた「新しい時代」とは、1000年紀に対する2000年紀とも、あるいは20世紀に対する21世紀とも想像されるかも知れませんが、差し当たって見据えたいと思ったのは、30周年を迎えた本学会の次なる30年のステージでした。人間らしさの本質をあそぶことにみとめたホイジンガにならうなら、「あそび」は人間や社会と文化のありようを理解するうえで有益なヒントを孕んでいるはずです。

さて、1000年や100年に比べて30年というのは確かに短いスパンでしょうが、技術革新がもたらす変化の著しい現代においては10年先を展望することすら困難です。こうした難題含みのメインテーマに果敢に応じて下さった3名のシンポジストの先生方には、当日の発表のために用意された草稿や資料などをベースに、本誌のための書下ろしに協力していただきました。他の発表者の発言内容や聴衆からの質疑・意見などにも配慮されているものと思われます。

杉浦恭先生（愛知教育大学）は、かつてホイジンガが学長を務めたことのあるライデン大学（オランダ）に留学した経験があり、文化の創造に果たすあそびの意義を『ホモ・ルーデンス』や『中世の秋』などの代表作を手がかりに考察して下さいました。ともすれば個人の自由勝手に許されると思われがちな「あそび」ですが、それを社会的次元において問題にする根拠や意義といったものを考えるヒントが得られるはずです。

米村恵子先生（江戸川大学）には、財団法人余暇開発センター主任研究員としてわが国の余暇政策の最前線で活動してこられた経験と豊富な見識を背景に、ライフスタイルとあそびとの関係性について論じていただきました。「あそび」は、レジャーやレクリエーションの活動の一つなどと通俗的に理解されるべきでなく、生活全体の価値に密接した重要な概念たることがあらためて確信されるでしょう。

麻生恵先生（東京農業大学）は、様々な活動の空間や環境の整備計画に携わってきた経歴がございますが、今回は「あそび」の空間整備の変遷と現在のユニークな動向を中心に報告していただきました。従来は一方向的に与えられるに過ぎなかった公共のあそび空間をユーザー自らが創りあげていく活動それ自体をもあそびとして享受しようとする気運が芽生えつつあるようです。その仕組みやアイデアは多くの示唆を含んでいると思われます。（シンポジウム司会・編集委員 嵯峨記）